

特集 ものを大切に暮らす。

Reduce.
Reuse.
Recycle!

私たちの暮らしは、いろんなモノに囲まれています。たくさん買って、消費して、すぐ捨ててしまう……そんなモノとのつき合い方って、寂しいですね。なるべくごみを出さない。もう一度使えるものは再利用する。廃棄されたものでも、資源として利用する。つまり、リデュース・リユース・リサイクル。ものを大切に暮らし、始めてみませんか。

写真／トビタテルミ



ペットボトルの上半分をカットして、草花を活ける花器に。かわしまよう子さんの部屋には、ものを大切にするヒントがたくさんある。

シンプルな毎日。

写真／トビタテルミ

Reduce.
Reuse.
Recycle!



野菜についているシールも捨てないでとっておく。「袋を閉じたりなど、ちょっとした時に役に立ちます」とかわしまさん。



かわしまよう子
1974年生まれ。2000年から、雑草を中心とした草花をテーマに、展示会や教室、著作活動などを始める。著書に、『しんぶるらいふ』『ごみのほん』などがある。
<http://www.ne.jp/asahi/higashi/kaze>



右上／ダイレクトメールの封筒や、FAXの感熱紙で折った小箱は、生ごみを捨てるときに使う。
右下／ごみを捨てるのは2週間に1回。それも、直径20cmほどのボール1個分くらいですむという。
中央／空いたびんや容器は、花器として活用。台は、ごみとして捨てられていた壊れた椅子を使っている。
下／お祖母さんから譲り受けたという炊飯器。

- かわしまさんの「ゴミを増やさないコツ」
- 一、買い物はマイバッグを持って。
 - 二、弁当、カップ麺はなるべくがまん。
「食べ残し」はもつてのほか。
 - 三、二、同様。
せめて家にいるときぐい、お茶は煮だしてつくりましょう。
 - 四、資源ゴミの分別を楽しむ。
 - 五、野菜の皮はうすめにむく（orむかない）。
キャベツの芯やブロッコリーの茎は、もつ品。
 - 六、洗剤、シャンプー、インスタントコーヒー、ボールペン……詰め替え用があるときはそれを買う。
 - 七、割り箸やスプーン類はもらわないこと。
使い捨てのものは使わないこと。
 - 八、子供のあそび道具は家にあるもので。
折り紙→チラシで代用
バズル→チラシで代用
らくがき帳→チラシのウラで代用
 - 九、花をかざる。
（空きびん、フィルムケース、しょうゆの容器
増やさないコツをつくる。
 - 十、自分なりの楽しみ方で、



「ごみのほん」より

「自分がやって気持ちのいいこと、自分ができることに、暮らしの中で取り組んでいきたいと思っています。私の場合、元々ものが捨てられない性格なので、くせのようなものなんですけど……」と語るかわしまよう子さん。自然が好きで、草花の楽しみ方を提案する教室や著作などの仕事に取り組む傍ら、毎日の暮らしの中で、なるべくごみを減らすよう、工夫をこらして生活している。

ものを捨てないために、かわしまさんがいつもするのは「似ているもの探し」だ。たとえば、人からもらったふりかけのパックは、余った食品を保存するためのジップロック代わりに。いらなくなったフィルムケースや空きビン、目薬の容器（！）は、草花を活ける花器に。ラップやアルミホイルは、買わないようにしているのだという。

「使い捨てのものって、あると便利だからどうしても頼ってしまうけど、それがなければいけない、いろいろと工夫ができるんですよ。これだけ捨てるものがたくさんあるから、せめて何かにもう1度使ってから捨てるように思っています。自分で考えて工夫するのは、苦にならないしむしろ面白いんですよ」とかわしまさんは笑う。

今あるものをできるだけ大切に使うことも、彼女のポリシーのひとつだ。炊飯器は20年、ラジカセは30年以上。部屋には、長年にわたってつきあってきたものがたくさんある。今のライフスタイルは、幼い頃一緒に暮らした祖母の影響が大きいかもしれない、とかわしまさんは当時をふりかえる。

「祖母は、『ものにも気持ちがある』と教えてくれました。ものがなかった時代に生まれた昔の人にとって、ものを大切にするのはとても自然なことなんだと思います」。

「自分で気づく」ことが、シンプルな暮らしへの第一歩だとかわしまさんは言う。「生活をしていく上で、どうしても捨てなければいけないものもあるし、ごみを全く出さない、すばらしく美しい暮らしなんて不可能ですよ。でも、ものを『ありがたい』と思う気持ちを持ち続けていられればいいな、と思っています」

人から言われてやるのは難しくても、自分で気づいて心がけると苦にならない。その気持ちこそが、まず大切にすべきものなのだ。

ものを大事に、ごみを少なくする日々を送っているかわしまよう子さん。少し気を配るだけでできる、シンプルな暮らしのヒントを教えてくださいました。

「使い続ける」ということ。

Reduce.
Reuse.
Recycle!

写真/坂本政十郎



D&DEPARTMENT東京店 東京都世田谷区奥沢8-3-2 電話03-5752-0120 <http://www.d-department.jp>

買った物は楽しい。でも、流行のサイクルに身をまかせていると、去年買ったばかりの商品ですら、「型落ち」「流行遅れ」といったカテゴリーに押し込みがちだ。グラフィック・デザイナー、ナガオカケンメイさんの経営するセレクトショップ「D&DEPARTMENT」は、そんなスピーディーな消費サイクルからこぼれ落ちた、たくさんモノたちに、豊かな可能性を見出している。

ショップのコンセプトは、「ロングライフ・デザインのセレクトショップ」。ロングライフ——つまり、「いつの時代も変わらない価値がある」とナガオカさんが考えるデザインの製品だけを販売するショップだ。普遍性のあるデザインならば、新品・中古にはこだわらない。中古品は、全国のリサイクルショップから倒産した旅館まで、あらゆる所に目を光らせセレクトする。また、廃番になってしまった優れたデザインの家具などを、メーカーに持ちかけて新品として復刻、販売するプロジェクトも行っている。

ナガオカさんがお店を始めたきっかけは、生活者の視点を忘れてしまった、デザイン業界に対する疑問からだった。

「いまの日本にはインハウス・デザイナー（企業内の社員デザイナー）だけでも、約10万人もいると言われています。彼らが日々、新たなデザインを作り出すと、消費のサイクルもどんどん速くなって、流行遅れになった製品は廃棄されてしまい、ごみも増え続けてしまいますよね」

そこで、ナガオカさんは提案する。——1人くらい、一切新しいものを作らないデザイナーがいてもいいんじゃないか。

「物理的に新しいものを生み出すだけが、デザイナーの仕事じゃない。過去に生み出された製品の中から、普遍性のあるものを選び出し、再び流通させるのも、デザイナーの仕事だと思おう」

近年、再生素材による製品も数多く出回っているが、「環境にやさしければ製造してよいのだろうか。そしてそれを簡単に購入し、消費してよいのだろうか」と疑問を持つ。

「僕にとつて究極の『環境によいこと』は、捨てないで使い続けること。つまり『ロングライフ』こそが、究極の答えなんです」



右頁/D&DEPARTMENT東京店
中古品と新品が絶妙なバランスで混じり合う、ロングライフ製品のセレクトショップ。
右上/リサイクルショップバッグ
お客さんから、不要になった紙袋を店頭で回収。ロゴマークの入ったガムテープをべたべたと貼って、ショップオリジナルとして再び使用！「ある意味、エコバッグです（笑）」（ナガオカ）
右下/RECYCLE MUJI
お店では、無印良品の買取と再販売も行っている。シンプルで飽きのこないデザイン製品を低価格で販売する無印良品は、「日本の生活者のデザインレベルを上げていると思う」（ナガオカ）
左上/re:school PHOTO FRAME
学校の机の天板を加工して作られたフォトフレーム。JIS規格のサイズ変更によって大量に廃棄処分となった学校の机を、再利用するプロジェクトから生まれた。「傷や落書きが残っていて、ひとつとして同じものがないんです」（ナガオカ）
左下/REDROP REUSE
まだまだ使える状態の廃棄物を点検し、引き取り、まだまだ使えますか？それとも使い直しますか？という、メッセージステッカー貼って再販売するプロジェクト。その第一弾が、靴メーカー「エース」の協力で実現した、USEDスニーカーの販売だ。

ナガオカケンメイ
1990年、日本デザインセンター入社。91年、原研哉氏と原デザイン研究所を設立。2000年に「D&DEPARTMENT PROJECT」を開始。02年には大阪に2号店を展開。



流行の新製品ばかり追いかけて、古くなったと思ったら捨ててしまう——。セレクトショップ「D&DEPARTMENT」は、そんな消費のあり方を見直す、新たな提案を行っています。



「夏フェス」で、ごみゼロを。

写真/キッチンミノル
文/紺谷宏之



今年8月に行われたサマーソニック大阪の会場で、来場者に「ごみゼロ」を訴えるボランティアスタッフ。



いまや夏の定番となった野外音楽フェスティバル。ここでも、私たちの暮らしをエコシフトするための取り組みが進んでいました。

右上/分別されたごみを集積所へ持っていくボランティアスタッフたち。
右下/会場入り口では、オリジナルのごみ袋を配布。
左上/ごみ箱の前に立ち、来場者に分別をナビゲートする「ごみゼロナビゲーション」活動。
左下/ペットボトルのキャップも分別回収！

イベントに参加するすべての人々が、ごみの削減やリサイクルに協力できる態勢を整えること。98年よりごみゼロナビゲーションに参加しているコアスタッフの濱中聡史さんは、こう話す。

「来場者やスタッフ、ごみ清掃業者の代わりに「ごみ清掃」を引き受けるのが私たちの目的ではありません。来場者をナビゲートすることで、彼ら自身の意識が変わってほしい。そして、イベントという非日常の空間から日常に戻った来場者に、社会を変える存在になってほしいという想いで活動しています」——イベントという小さな「社会」の仕組みが変われば、日本社会そのものも、エコシフトできるかもしれない。

夏フェスらしい和やかな雰囲気の中、ごみ分別を来場者に促しているボランティアスタッフ。その中でも会場にこだまする音楽に合わせて、体でリズムをとっている姿は何ともピースフルだ。環境問題を始めとする多くの問題を来場者と共に楽しみながら考えるごみゼロナビゲーションという活動。音楽とエコロジーがナチュラルに共存している、なるほど納得なボランティア活動だ。

音楽好きの若者が「一度は行ってみたい」と憧れる、夏の野外音楽フェスティバル、通称「夏フェス」。なかでも、サマーソニックは2日間に渡り開催され、国内外110組のアーティストが競演する、夏フェスの代表格だ。

その大阪会場を訪ねてみると、思いのほか会場がクリーンで驚く。入場ゲートをくぐって最初に目に入ったのが、入場者一人ひとりにごみ袋を配布するボランティアスタッフの姿。さらには、会場内15カ所のごみ箱の前でも、来場者に対して、ペットボトル、紙コップ、割りばしなど、5種類の分別を呼びかけている。そして、マナーよく分別に協力する来場者の姿——。

こうした会場内での「ごみゼロ」に取り組んでいるのが、国際青年環境NGO「A SEED JAPAN」だ。「ごみゼロナビゲーション」と呼ばれるこのプロジェクトの始まりは1994年。野外コンサート「レジェエ・ジャパンスプラッシュ'94」を皮切りに、今ではフジロックなどの世界規模の音楽フェスティバルから、自治体主催の環境イベントにまで広がっている。A SEEDの目的は、

ものを大切にするための こんなアイデア

写真/坂本政十郎

まだまだあります、
ものを大切にするための取り組み&アイデア。
ここではその一部をご紹介します。

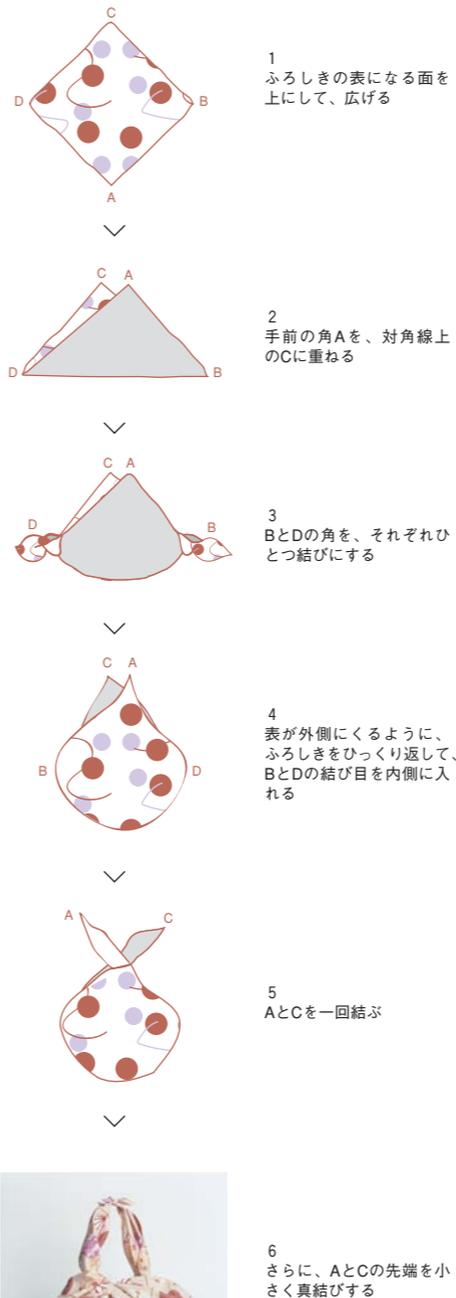


ふろしきでお買い物

レジ袋の削減は、身近にできるエコの代表格。レジ袋の代わりにマイバッグ……という意識を後押しするように、最近では、思わず持ち歩きたくなるような、おしゃれなマイバッグが次々と登場。環境への配慮はもちろん、自分らしさを演出するアイテムとしても、人気を集めている。そんな中、改めて注目されているのが、日本古来のエコバッグとも言える、ふろしき。「ふろしきの良さは、持ち運ぶものに合わせて、変幻自在に形を変えられるところ。時にはシヨルターバッグ、時には手提げといった具合に、さまざまなアレンジが

できるんです」と、ふろしき専門店「むす美」の山田悦子さん。むす美では、ふろしきの実用的でおしゃれな活用法を、数々提案している。また、ふろしきの柄も、昔ながらの和柄に加えて、水玉模様など、現代的なデザインのものを含めて、約50種類以上も取り揃えている。若い人たちの間では、ふろしきが「新しいスタイル」として、浸透し始めているという。
現代の解釈を得て、今に息づく、ふろしき文化。ポケットやカバンに忍ばせて、お買い物も、粋に楽しみたい。

シヨッピングバッグの作り方



むす美
電話：03-5414-5678
<http://www.kyoto-musubi.com/>

粗大ごみ再生計画

文/本吉恭子

左/4人の専門スタッフが、工房で粗大ごみを再生。
分解・洗浄・再塗装などの過程を経て、再び流通していく仕組みだ。
下右/修理用にストックしてある、家具の取っ手や金具。
下左/仕上げのニス塗り。一つひとつ、ゆっくり手をかけて再生させる。



横浜市 鶴見リサイクルプラザ
神奈川県横浜市鶴見区末広町1-15-1
電話：045-521-0480

本皮張りのソファ、ダイニングテーブル、ベビーベッド……。ざらり並ぶ家具の素性は、なんとすべて元・粗大ごみ。「横浜市 鶴見リサイクルプラザ」では、粗大ごみから選別した家具を、安価なりサイクル品として横浜市に提供しているのだ。運営に携わる横浜市指定管理者のテスコ株式会社青木裕さんは語る。

「粗大ごみのなかには、まだまだ使える家具が多くあります。それらを毎日選別し、リサイクル家具として毎月120点、展示販売しています」
購入するためには、まず専用紙またはインターネットでの申し込みが必要。その後、毎月1回の公開抽選制で当選すれば、ついに希望の家具を手に入れるという仕組み。申し込み件数は年間1万5千件以上、なかには約200倍という激しい競争率となった人気商品もあったとか。粗大ごみの山から選ばれた中古家具は、4人の専門スタッフによって、ひとつずつ消毒され、ときに補修が施される。そうして生まれ変わった家具たちは、粗大ごみとして処分される運命を逃れた幸せ者だ。新しい持ち主にも、そんな幸運のおすそ分けがあるかも!?